



りつ約二百年かけて親の太木を締めあげると、遂に締め殺しにあつて枯れてしまふ。更に不思議なことに、今度は10m位離れた別の木を探して乗り移つていく。

この様にして約二百年ずつかけて親木を枯らしつて移つて生き続ける。係官は現在の木から10m位離れた木を指して二百年後には此奴がやられてますよ、と言つて、何々と笑つていた。私達はどうかして隣の木を探すのかと質問したところ鳥が羽根を広げるように枝を広げて探すのだという。寿命が無限なのかと思つたら、そんなことはなく、一千年と答えがあつた。

因みにオーストラリアに白人が移住してきてまだ二百年、カーテンフィグツリーがやつと一本目の親木を締め殺した年月である。自然は不思議だとつくづく思う。

投稿(匿名希望)

極寒の北極圏を飛ぶ スーパー竹とんぼ

北緯70度、北欧フィンランドのラップランド地方の冬は、昼間でも気温は氷点下30度、夜間は氷点下50度に達する。

太陽は地平線から全く顔を出さない日が三ヶ月、あとは僅かに顔を見せる程度の日が続く。しかし、冬は太陽の無い代償としてオーロラが出現する。このオーロラは青と緑色でカーテンが揺れるように空を駆けめぐる。だが、昼間は出ない。

国際竹とんぼ協会のG氏から託されたスーパー竹とんぼは翼が赤く塗られ、G氏からはオーロラの中に飛ぶ姿と一緒に写った写真を撮つてほしい注文があつた。とても難しい注文で出来る訳が無い。そこで代わりを考えて妙案を思いついた。オーロラよりもずっと美しいフィンランド美人の胸に抱いてもらうことである。それならG氏も満足してくれる筈だ。

美人はミー? (私に)と尋ねながら大変喜んで、アーユ、チ



ヤニーズと聞いてきたので、ノイ、ジャパニーズと答えて昂然と胸を張つて見せた。かくして、ホテルの客の子供達を交えて、約10本のスーパー竹とんぼが雪深いラップランドの上空に50の瞳と黄色い声援に送られてヒラヒラと舞つた。

遂に国際スーパー竹とんぼ第3弾は、はるか東方の日出する国からのロマンを乗せて北緯70度の北極圏の空に羽ばたいた。

この快挙、次は何処で繰り広げられるのか楽しみである。

投稿(匿名希望)

教習番組JKKST映

去る一月二十七日午後会館二階において、国宝ビデオの上映第二弾として法隆寺上巻、東大寺上巻薬師寺、唐招提寺を上映致しました。鑑賞された方々は約30名で、大反響且つ大変感動されておりました。関係者と致しましては大変喜ばしい限りです。次回は世界遺産か、TBS制作の『失われた文明』シリーズを上映致したいと思っております。

文化部

日本一シタキと語る

親戚の陸田さんから、かねてより誘われていた未だ雪深い山荘を訪れた。所は上越国境の山懐、谷川岳のすぐ近くである。

雪は三月半ばだというのに2mはある。昼過ぎ、山男の陸田さんの案内で家内と三人合橋から湯檜曾川の川沿いに『かんじき』を履いて4kmをエッチラ、オッチラと歩き、やつとたどり着いたのは谷川岳の一の倉沢の直下で、雪山の中にそびえ立つ高さ700mの岩壁の凄まじい姿に息を飲んだ。

夜は陸田さんが学生時代にあわや遭難というのを助けてくれた40年来の恩人、マタギ(猟師)を招いて酒を酌み交わした。数年前にNHKの特集番組で放映された、熊獲り名人の吉野秀市さんである。吉野さんは今日まで無事でこられたのが、自分でも不思議でならないという。勿論、危険な目にあつたことは数え切れない。ただ、悔やまれてならないのは、案内した客が不注意で飛び出し、熊に目を抉られて瀕死の重傷を負つたことだという。このくだりで、吉野さんは大五郎という焼酎をグイグイと煽つた。心の中の大きな傷に違いない。

鹿の刺身を肴に熊獲りにまつわる話は話せばききつがなかつたが、夜も更けて、偶々、陸田さん夫妻はご主人が社用でアメリカのミネアポリスへ、奥さんがインテリアの勉強でフランスのパリへ、数日のうちに出発するというので、送別の宴を兼ねる事になった。

そのとき、雷が遠く鳴り始めた。客分でも何のもてなしも出来ない私は、即興で、吉野さんには、雷ひびき雪深き里に春来る、陸田さんには、雪崩落つ一の倉沢黒く映え、と全く拙い句をおくつた。

二人は何も言わずにただ陽に焼けた笑顔を私に向けてくれた。

投稿(匿名希望)

老夫婦の旅だより④

スペインのジプシー少女

スペインのトレドはローマ時代からの古い歴史があり、六世紀以来、約千年の間スペインの首都であつた。有名なスペイン王家の宮廷画家エル・グレコが活躍した舞台でもある。町を囲むタホ川は深い峡谷をつくり、対岸からのトレドの町の眺望は美しい一幅の絵の様である。遙か東方の国から観光に来た老夫婦は、タホ川に架かる橋の上で美しい風景に見とれていた。と、十二、三歳の少女が近付いて来て、カスターネットを二つ差出して愛くるしい。少し離れた場所にもこれ身なりの貧しい婦人が立って、バラの花を数本持つていて、ジプシーの一家と思われる。恐らく一日に数える程しか売れないであろう。老夫婦は貧乏かろう一家の境遇に思いを馳せて、数個のカスターネットと数本のバラの花を買って求めた。少女は可愛い笑顔を見せて何度もスキップしながら礼を述べた。老夫婦はその愛らしい姿が印象に残り、少女は将来とても美しい娘に育つだろうと話合つた。フラメンコ舞踊の華なることは間違いない。

托鉢するミャンマーの少年

ミャンマーは国連の経済制裁を受けていて、人々の生活は非常に貧しく町は荒廃している。だが、この国は国民全体が熱心な佛教徒で僧侶は尊敬の的である。遙か東方の国から観光に来た老夫婦は、庶民の暮らし振りを肌で知りたいたい、独特の臭気と雑踏に揉まれながら市場の中を散策していた。と、一人の少年僧が近づき托鉢の釜を差し出して、澄んだ目でじっと訴えている。釜の中には米飯や雑多な食べ物が入つていて、これを見た老夫婦は堪らずパンを買つて喜捨した。少年僧は礼を述べて去つたが、その顔の汚れない輝きと、礼儀正しい立ち居振る舞いに深く感動し、将来は必ず高僧になるだろうと話合つた。ミャンマーの佛教界を背負つて立つことになればと思うだけで、老夫婦はとても満たされた気持ちになるのだ。

投稿(匿名希望)

食文化の違い

ああ愉快なり

「日本人は蝋を食べる」といつて欧米人は驚く。彼等には蝋の姿が悪魔に見えるという。フランス料理にエスカルゴは付き物だが、日本では「かたつむり」だからと嫌う人が多い。北極圏の北極圏に住む人口約五万人のラップランド人(サーメ人)は、トナカイの生肉を食べ、生の血液を飲むがラップ博物館の学芸員は、残酷に思うでしょうが、太陽の光に恵まれない地方に追われたサーメ人は、生肉からビタミンB1を生血からビタミンDを摂取してクル病等から免れていると解説した。

マカオから中国本土に入ったところに珠海という町がある。このガイドの揚さんは清楚な感じの美人である。彼女は中国人の食文化について次の様に解説した。「中国人は生きて居るものは何でも食べます。ヘビ、トカゲ、ミミズ、ネズミ、犬、猿など大好物なんです。我々は中国に来てから食べた料理の中に、これらのゲテモノが入つていたのではと心配になつた。彼女に聞くと「入つてはいたが、入つてなかつたか、確かな事は判らない」と答えて、我々の反応を見て大笑いしている。こちらも反撃した。「何でも食べるのなら揚さんはパンダを食べた事があるのか」「食べたら私は死刑になつています」。ここで我々に一本取られたと気が付いて、揚さんは美しい横顔を見せて微笑した。

ベトナムのガイドのファンさんは父親が元ベトナムの司令官、これが大変に自慢である。息子の彼も軍隊では山奥でいろんな物を食べた経験がある。彼はベトナム人の食文化について次の様に解説した。「ベトナム人は、犬、猫、コブラが特に大好きです。しかし、一般の人は高価で食べられません。牛肉や豚肉の十倍はします。金持ちが専門店を食べますが、一番高級な料理は猿の脳味噌です」。

院内感染

最近、病院で患者に間違つた薬(点滴・毒物)等を与え、死にいたらしめると言う事故が相次いでいる。また患者を取り違えたり、丈夫な者が必要な手術をしたり、間違つた治療をするという事故もしばしばある。

それは中小のあまり設備の整っていない病院だけではなく、国立の大病院や有名大病院でも起こる。何故この様なことが起こるのか、私は医師でもなければ専門家でないのだから、その原因は新聞やテレビの情報に頼るしかない。それによると、看護婦、医師の初歩的なミスとしていつも病院側では謝罪している。

しかし、看護婦や医師たちを管理する病院側にも管理義務の欠如が多分にあるのではないかと。過日、私は市内にある某病院に月一回の定期検診に行つた。その折男子用のトイレに入つた。たまに先客が二人いて用を足していた。一人は通院患者らしき男、もう一人は白衣を着た医師。年齢は三十才を少し越したかと思われ、林格の良い男。通院患者の後私は件の医師の隣に立つたが、その医師はまだ便器から離れない。余程我慢をさせて尿が溜つていたのであるうか、だが私と同時に用は終わった。私はうしろにある自動手洗い器で手を洗つたが、その医師は手も洗わずドアを開けさつと出て行つた。私は驚いた。この現場を見た者は私に限らず皆驚くであろう。病院内で手も洗わずにトイレから出ていくとは何事かと、急いで彼の医師の後をつけた。ところがその医師は、トイレから十メートル位しか離れていない眼科の診察室に入つた。またまた驚いた。診察中の医師がトイレに行き(これは仕方の無い事だ)、手も洗わず患者を診察する、しかも眼科である。私は開いた口が塞がらなかつた。あのまま患者の眼を触るのだろうか、診療器具に触れる事は間違いない。

院内感染とは今まで食事、また患者が持込んだ菌が、他の入院患者に移したものとばかり考えていたが必ずしもそうではない様だ。私は帰宅してすぐその病院に電話をし、院長若しくは事務長にこの件を伝えようとしたが、中々通じない。それではとEメールで送ろうとしたがアドレスがはつきりしない。結局この一部始終を記し厳重注意する様、ファックスで送つたが、今日に至るまで未だに返事が来ない。握り潰されたのかも知れない。これは証拠が無いからだと言ふことが分かつた。この様なモラルと言ふか、衛生観念の低い病院が、院内感染や医療ミスに犯すのではないかと。

私は決意した!...

次回この病院へ来る時は、デジカメを持ってきて、白衣を着た医師がトイレに入つたら、間髪をいれず後をつけデジカメで証拠写真を撮つて病院長に送りつけよう。(しかしトイレの張り込みは格好がわるいなあ!下手をすると痴漢か挙動不審な男として、逮捕されるかも知れない)

五等星

